SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

文学者の「口語文」観：作家による文章論・古典の現代語訳の史的研究

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学 公開日: 2020-04-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中村, ともえ メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/00027371

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：１３８０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１６７６０

研究課題名（和文）文学者の「口語文」観－作家による文章論・古典の現代語訳の史的研究

研究課題名（英文）Writer's Philosophy of Modern Japanese : A Historical Study of Writing Theory and Translation of Clasical Literature

研究代表者
中村　ともえ（Nakamura, Tomoe）

静岡大学・教育学部・准教授

研究者番号：７０５８０６３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：谷崎潤一郎の『源氏物語』の現代語訳（「谷崎源氏」）の研究を中心に、以下の研究を行った。翻訳による近代日本語の変質を批判する谷崎の評論と、その後の古典の現代語訳の関連を明らかにした。「谷崎源氏」の改訳・改訂と、『源氏物語』の敬語に関する研究の接点を明らかにした。また、与謝野晶子の『源氏物語』に関連する仕事、窪田空穂による『源氏物語』訳についても考察を行った。口語文については、芥川龍之介と佐藤春夫の評論も比較・検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
谷崎潤一郎には、『文章読本』に代表される文章論と、『源氏物語』の現代語訳（「谷崎源氏」）に代表される古典の現代語訳の仕事がある。創作を重視する近代文学研究においては軽視されてきたものだが、『文章読本』も『源氏物語』の現代語訳も、同時代から現在まで作家による類例が多数存在している。それらを「口語文」というテーマで総合的に検討する視座を示したことが、本研究の意義である。

研究成果の概要（英文）：In this Study,I mainly focused on the translation of "The Tale of Genji" to modern japanese by Junichiro Tanizaki.It is called "Tanizaki Genji". Tanizaki criticized the change of modern Japanese.I clarified the relationship between his criticism and his translation.Tanizaki revised "Tanizaki Genji" many times.I clarified the contact between his revision and a study of honorifics of "The Tale of Genji".In addision,I examined Akiko Yosano's work related to "The Tale of Genji" and Utsubo Kubota's translation of "The Tale of Genji".As for modern Japanese,I compared Tanizaki's philosophy with Akutagawa Ryunosuke's and Haruo Sato's.

研究分野：日本文学

キーワード：谷崎潤一郎　源氏物語　玉上琢彌　窪田空穂　与謝野晶子　佐藤春夫　芥川龍之介　文章読本

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

文学のことばに関する研究は、「文語文」から「口語文」への変革の時期の文学作品（小説・詩）を主な対象としてきた。近代文学成立期の小説の研究については、多くの研究の蓄積があり、大正期の口語詩の成立に関しても研究が行われている。しかし、近代文学成立以降、「口語文」は制度化し、「文体」という語も文の種類ではなく、各作家の個性的な表現という意味に変化する。本研究では、自明化した「口語文」を作家たちが再び検討する時期・場として、昭和初め以降の文章論（口語文論）と古典文学の現代語訳（口語訳）に着目することにした。作家による翻訳、特に古典の現代語訳は、創作に対して二次的なものと見做され、近代文学研究においては軽視されてきた。たとえば谷崎潤一郎による『源氏物語』の現代語訳（「谷崎源氏」）については、主に古典文学研究の領域において、近代における古典文学の受容の例として位置付けられてきたが、近代の日本語であるその訳文自体は分析の対象になっていない。作家による文章論と古典の現代語訳を総合的に検討することで、作家たちが近代の日本語の文章（「口語文」）をどのように捉えてきたかを明らかにすることができると考えた。

２．研究の目的

本研究は、近代日本の作家たちが「口語文」をどのように捉えてきたかを解明し、歴史的に検証することを目的とするものである。日本の文学の近代化は、文体に関して言えば、「文語文」を「口語文」に転換することを意味した。近代文学は、作品に使用することばの口語化を目指し、さまざまな試行を経て、明治末には小説、大正半ばには詩の領域で、「口語文」の使用が一般化した。「口語文」は以後、文学のことばとして制度化した。そのような「口語文」による文学の成立以降、作家たちは「口語文」をどのように捉えていたのか。本研究では、自明化した「口語文」が作家たちによって再び検討される時期・場として、昭和初めから戦中にかけて（1930～40 年代）の文章論と古典文学の現代語訳に着目した。具体的には、作家による文章論・古典の現代語訳を検討し、同時代の日本のアカデミズムとの接点を探ることで、作家たちの「口語文」観を歴史的に位置付け評価することを目指した。作家による文章論と古典の現代語訳を手がかりにして、彼らが近代の日本語の文章をどのように捉えてきたか、作家の「口語文」観を明らかにすることが本研究の目的である。

３．研究の方法

谷崎潤一郎の 1930～40 年代の文章論・古典の現代語訳を軸に、同時期の複数の作家の仕事と比較・検証するという方法をとった。文章論に関しては、芥川龍之介・佐藤春夫の口語文に関する評論や発言を取り上げ、用語や力点の違いを手がかりにして各人の「口語文」観を抽出した。『源氏物語』の現代語訳に関しては、谷崎の最初の『源氏物語』訳である『潤一郎訳源氏物語』と同時期に刊行された、与謝野晶子訳（二つ目の訳である『新新訳源氏物語』）、窪田空穂訳（分担によるものを除くと最初の訳である改造文庫版『源氏物語』）を取り上げ、訳文の分析や、同時代の評価についての調査を行った。また、古典の現代語訳に関しては、日本のアカデミズムとの接点を探った。谷崎による『源氏物語』の現代語訳に関しては、校閲者である国語学者の山田孝雄の口語文法論や、改訳・改訂に関与した『源氏物語』研究者である玉上琢彌の『源氏物語』の敬語に関する研究に着目し、草稿の調査や、関連する論考の整理を行った。与謝野晶子の古典文学に関連する仕事に関しては、国文学者も関わった女性教養誌『むらさき』での言及を調査・整理した。

４．研究成果

谷崎潤一郎による『源氏物語』の現代語訳（「谷崎源氏」）を軸に、主に以下の三点の研究を行った。

（１）谷崎潤一郎と佐藤春夫・芥川龍之介の口語文に関する議論を比較・検討し、作家たちのそれぞれの「口語文」観を抽出した。また、佐藤・芥川とともに行った大正半ばの谷崎の翻訳を整理し、昭和初めの古典の現代語訳を含む翻訳及び翻訳に関する評論の背後にある問題意識を明らかにした。

雑誌論文②では、昭和 9 年（1934）に書き下ろしで刊行された谷崎潤一郎の『文章読本』が、昭和 2 年（1927）頃に芥川龍之介・佐藤春夫と共有していた「口語文」という問題の延長線上にあることを明らかにした。谷崎の『文章読本』には佐藤の口語文論への言及があり、佐藤も『文章読本』の書評を書いて応答している。ただし、佐藤が口語文論を評論の形で発表するのは谷崎の『文章読本』刊行以後のことであり、それまでは昭和 2 年の芥川の評論「文芸的な、余りに文芸的な」の中の佐藤との会話を再現した箇所でしか公表されていなかった。谷崎も芥川も、佐藤の口語文論を参照した上で口語文について自説を述べているが、三者の議論は用語や力点が異なる。三者の口語文論を比較することによって、各人の「口語文」観を抽出し、谷崎の場合は、口語文への関心が『源氏物語』の現代語訳をつながったことを明らかにした。

学会発表②・③をもとにした雑誌論文⑤では、谷崎潤一郎の翻訳史の中に『潤一郎訳源氏物

語』（谷崎の最初の『源氏物語』の現代語訳）を位置付けた。谷崎は大正半ば頃、当時流行していた世紀末文学の翻訳を、佐藤春夫や芥川龍之介らとともに行った（佐藤との共訳を谷崎訳として発表し、芥川の翻訳をもとに翻訳を行った）。昭和初めには、邦訳のない小説を自ら選んで翻訳し、その一つは「中央公論」の「作家の翻訳」特集号に掲載された。従来の全集（没後版及び愛読愛蔵版）は、これら西洋語（英語）から日本語への翻訳作品のみを「翻訳」という分類で収録し、古典の現代語訳は別の扱いにしていた。だが谷崎の昭和初めの翻訳は、彼の最初の古典の現代語訳である御伽草子の訳（「三人法師」）や、円本に代表される同時代の翻訳の隆盛を批判的に論じる評論（「饒舌録」「現代口語文の欠点について」）と同じ時期に発表されている。これらを総合して検討することで、「悪文の翻訳」（「饒舌録」）によって近代の日本語（口語文）が変質したことへの批判的な認識が、この時期の谷崎の古典の現代語訳を含む翻訳及び翻訳論の背景にあること、さらにその認識が『潤一郎訳源氏物語』の起点になったことを明らかにした。

（２）戦中において、『源氏物語』の現代語訳をはじめとする古典文学に関連する仕事を行った作家たちが、時代状況にどのように対処したか、それらの仕事やそれに対する評価が戦後にどのように変化したかを、谷崎潤一郎・窪田空穂・与謝野晶子について明らかにした。

図書③所収の論文では、戦中に刊行された二つの『源氏物語』訳、谷崎の『潤一郎訳源氏物語』と、国文学者であり歌人である窪田空穂の訳を比較した。二つの訳には光源氏と藤壺の密通に関して省略箇所があることが知られているが、具体的にどの部分をどのように処理したかは検証されていなかった。このテーマに関しては、既に調査を行い、シンポジウム「「谷崎源氏」を考える」において口頭発表していたが（「削除という方法―『潤一郎訳源氏物語』考」、谷崎源氏研究会、国学院大学、2016）、その成果を踏まえ、谷崎訳における削除と空穂訳における伏字処理を比較・検討し、翻訳の倫理について考察した。

図書②所収の論文では、最初の現代語訳である『新訳源氏物語』の後、主に昭和期に行われた与謝野晶子の『源氏物語』に関連する仕事（現代語訳、短歌、研究、教育活動など）が、女性教養誌『むらさき』誌上でどのように言及・評価されていたかを調査・整理した。晶子の『源氏物語』の現代語訳、特に二つ目の訳である『新新訳源氏物語』については、同時期に刊行されていた谷崎の『潤一郎訳源氏物語』とあわせて既に論じたことがあるが（「現代語訳の日本語―谷崎潤一郎と与謝野晶子の『源氏物語』訳」、井上健編『翻訳文学の視界　近現代日本文化の変容と翻訳』、思文閣出版、2012）、そこでは検討できなかった同時代の読者の反応と、戦後の評価の一例を明らかにした。『むらさき』には国文学者も深く関わっているが、晶子の昭和期の古典文学関係の仕事は、晶子の没後、戦後に評価を得ている。これは以下の（３）にも関連する点である。

（３）作家による古典の現代語訳と日本のアカデミズムとの接点を指摘した。

雑誌論文③では、谷崎潤一郎の一連の『源氏物語』の現代語訳のうち、二つ目の訳である『潤一郎新訳源氏物語』の成立過程に着目し、『潤一郎訳源氏物語』から『潤一郎新訳源氏物語』への改訳の作業に、『源氏物語』研究者である玉上琢彌が加わった意味を考察した。一般に谷崎は『源氏物語』を三度訳したとされるが（『潤一郎訳源氏物語』・『潤一郎新訳源氏物語』・『谷崎潤一郎新々訳源氏物語』）、それらは最初の訳である『潤一郎訳源氏物語』の訳文の改訳・改訂という一続きのものとして捉えられる。既に共同研究によって『潤一郎新訳源氏物語』の愛蔵本の段階で改訂が行われていることを明らかにしているが（中村ともえ・三嶋潤子「〈谷崎源氏〉考―『潤一郎新訳源氏物語』愛蔵本における改訂に関する調査報告―」（一）～（三）、「京都大学国文学論叢」、25・26 号、2011、科学研究費研究活動スタート支援、課題番号 22820031、2010～2011）、その成果を踏まえて、『潤一郎新訳源氏物語』の愛蔵本における敬語の改訂と、玉上の『源氏物語』の敬語に関する研究（論文及び評釈）との接点を明らかにした。

学会発表①では、近代における『源氏物語』の受容が作家による現代語訳という形をとったことを指摘し、与謝野晶子・円地文子・舟橋聖一らの『源氏物語』訳の特徴を示し、谷崎の最初の訳である『潤一郎訳源氏物語』の文体の特徴について考察を行った。『潤一郎訳源氏物語』の校閲者である国語学者の山田孝雄の口語文法論にも言及したが、触れるにとどまった。この点については、今後論文化する中で考察を進める予定である。また、この発表は、『源氏物語』の時代を越えた受容や展開をテーマとしたシンポジウムで、中世と近世の受容に関する発表とともに行ったものである。異なる時代の文学を専門とする古典文学研究者たちと質疑を行ったことも成果の一つである。

雑誌論文①では、谷崎の戦後の小説である『小野篁妹に恋する事』の大部分が、『篁日記』のある箇所を現代語訳したものであることを指摘した。作中には参照した書物として宮田和一郎の『王朝三日記評釈』の名前が挙がっている。『少将滋幹の母』をはじめとする戦後の谷崎の王朝小説と古典文学研究の接点については、今後の研究の課題である。

その他、「口語文」観には関わらないが、図書④所収の論文では、明治 30 年代の日本のアカデミズムで行われた美学の議論が、作家たちの仕事に及ぼした影響の一端を明らかにした。

以上の成果のうち、谷崎潤一郎の「口語文」観を芥川龍之介・佐藤春夫と比較した雑誌論文②、「谷崎源氏」における敬語の改訳・改訂と「新訳」に関与した『源氏物語』研究者の玉上琢彌の敬語論の接点を指摘した雑誌論文③、『潤一郎訳源氏物語』を谷崎の翻訳史の中に位置付けた雑誌論文⑤は、加筆・修整の上、図書①の第三部「現代口語文の条件」にまとめた。「口語文」というテーマのもと、谷崎の文章論と古典の現代語訳を分析したパートであり、これが現時点

での最もまとまった形での成果である。なお、図書①には、戦国時代に取材する歴史小説の一つとして、御伽草子の現代語訳である「三人法師」を谷崎の他の歴史小説及び歴史小説論の中に位置付けた雑誌論文④も収めている（第二部「近代小説という形式」）。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　5　件）

① 中村ともえ、「小説の材料考―谷崎潤一郎『紀伊国狐憑漆掻語』」、朱、査読無、62 号、pp.26-40、2019
② 中村ともえ、「谷崎潤一郎と口語文―芥川龍之介と佐藤春夫を補助線に」、翻訳の文化／文化の翻訳、査読無、14 号、pp.125-132、2019
③ 中村ともえ、「〈谷崎源氏〉と玉上琢彌の敬語論」、翻訳の文化／文化の翻訳、査読無、13 号、pp.43-57、2018、10.14945/00024904
④ 中村ともえ、「谷崎潤一郎『聞書抄』論―歴史小説の中の虚構―」、昭和文学研究、査読有、76 号、pp.34-46、2018
⑤ 中村ともえ、「谷崎潤一郎と翻訳―『潤一郎訳源氏物語』まで」、翻訳の文化／文化の翻訳、査読無、12 号、pp.15-28、2017、10.14945/00010039

〔学会発表〕（計　3　件）

① 中村ともえ、「作品としての現代語訳―『潤一郎訳源氏物語』とその文体」、東京大学国語国文学会（平成 29 年度大会、シンポジウム「源氏物語―時代を越えて」）、東京大学、2017
② 中村ともえ、「「文学的翻訳」の背景―谷崎潤一郎はなぜ『源氏物語』を訳したのか」、韓国日本研究団体（第 5 回国際学術大会）、嘉泉大学校、2016
③ 中村ともえ、「谷崎潤一郎と翻訳―『潤一郎訳源氏物語』まで」、翻訳文化研究会（第 30 回例会）、静岡大学、2016

〔図書〕（計　4　件）

① 中村ともえ、『谷崎潤一郎論　近代小説の条件』、青簡舎、380、2019
② 中村ともえ、「与謝野晶子―『源氏物語』と短歌」、今井久代・中野貴文・和田博文編『女学生とジェンダー　女性教養誌『むらさき』を鏡として』、笠間書院、454（pp.407-419）、2019
③ 中村ともえ、「削除と伏字―谷崎潤一郎と窪田空穂の『源氏物語』現代語訳」、今野喜和人編『翻訳とアダプテーションの倫理　ジャンルとメディアを越えて』、春風社、414（pp.107-134）、2019
④ 中村ともえ、「学問としての美学―谷崎潤一郎の知的背景」、五味渕典嗣・日高佳紀編『谷崎潤一郎読本』、355（pp.176-184）、2016

６．研究組織

(1)研究分担者
なし

(2)研究協力者
なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。